
Selection Squad's erotica 03
RE03
FOR ADULT ONLY


RE03


――なんと言うことだ。あの斬っても斬っても果てなかった異界の邪神を
私は口にしていたというのか……!
と、セイバーがタコ嫌いを語った夜の事
久しぶりに夢を見た・


……異界の生物一匹に
兵は全滅…
騎士王と呼ばれた私まで
この有様とは
愚かよのう
星霜の果てに住まいし異貌の神を祖とする余に…


猿の変り種に過ぎぬ人間が逆うと思うたか
な、神だと…ッ
ふんッ 余を討とうなぞ無知が過ぎるが
ズルズル
余興としては楽しめた
だが足りぬッ
何ッ!?
もう一時、余を楽しませよ
ずりゅ
汝の身をもってな…



ズ
ズブ
んうッ!?
んぐ、ん、
ギリ
まずは清め
我が神酒にて
ぐっ
んううッ!?
ズポッ
ズポッ
ジュポ
んぐっ
ゴキュ
ゴキュ
ぐっ!?
その身に澱みし
穢れを払うが良い


何だ・・コレは・・酒・・？
だが今まで口にした如何なるものとも違う
甘く・・薫り高い・・
信じられん
なんたる・・・
美味であろう？
ッあ!?
ぶびゅるる


がッ、あがッ
かはッ
げほっ
ごほッ
ドロ…
バカを言う！さあ殺せ！食らうが良いッ！
だが覚悟せよッ！
ハァ
ハァ
王の意地にかけて貴様の臓腑を食い千切り
地獄の苦しみを与えてくれるッ！
勘違いするな 人の王よ
言ったはずだ
ズル
ズル
ズルズル


楽しませよと
!?
な、なにをする－
美しい肢体を持ちながら…
生まれを偽り騎士王として君臨する女…
ずるずる。
くくく 楽しみよのう
ぐに…
ぐに…


汝の蜜壷は如何な味わいか
これまでか
だが恥辱に塗れるくらいなら
せめて騎士として…
ぐ…
ズ…
ギ
チュ
!!
ッあああああ!?


ッあああああ!?
あ、あぁぁ
あああッ−−
くはははは!
無駄よ無駄ぁ
ずる
ずる
ずぷんッ
我が洗礼を
浴びたとあっては
おのが命とて
自由に出来ると
思うな
あ、がッ!?


ずる ずる
あ
あ は
だが先ほど意地があると申したな
ああ
ずる ずる…
ずる
よかろうその意地とやらに免じ自害を許そうではないか
ズチュ
ズチュ
だがそのように声をあげ
いっあ
はしたなく涎を垂らし呆けた口を閉じねば
は
あ
いつまで経とうと
あ
ぬる ぬる
ぬる
あ
ぬちゃ
舌なぞ噛み切れぬぞ騎士王よ?
ひっ!?
許せない…
ギュッ


敗北と屈辱を受け入れている非力な自分が
ズップ
ズブッ
ひと突きごと身体がたかぶっていく自分が
あぁんあ
泣いてばかりではわからぬぞ騎士王よ？
ゴポ
は
答えられぬのか騎士王よ？
あっ
ゴポ
ゴ
なにより…
あ
あ
ビクッ
ああ
ああ、それとも既に…
とうに捨てたはずなのに…
ビクッ
ああ


メスとしての喜びに矜持も誇りも消えてしまうたか?
ッあああああ!?
少女のような泣き声を上げてしまう自分が
許せない…ッ
ほう? この期に及んでまだ目が曇らぬとは
さすがというべきよの、騎士王よ


びくん!!
だが…
ひぐっ!?
ぎゅる
ぎゅるるる
ぎゅるお
は…ら、あ!?
ぷくぅ
先ほどの神酒 漬めというた よな?
汝の気を やるだけでは ない
臓腑の不浄を濯め 押し流す
ああ、安心せよ
ぐにぐに
ぞる
あっ
ピュッ
ピュルッ
祓い解し浄化された 汚物はもう ただの水よ
むに
にゅる


そして共に闘う兵も
守るべき民も
ここにはおらぬ
やめ　ッ!
触る　なぁッああッー
裏からッ
かき、まわされ
てッ!?
そう、誰に
はばかる事なく
ずにゅ
ぐにゅ
ズブ
ズブ
だ　めッー
おねが…っ
やめて　ッ!
ぐにゅ
ひり出すが良い
ヤッ!
ぶちゅ
あッ!
んあああああはぁッ!!
ぶちゅるるるる



で、出ひゃ出て、る、ッー
出てるのにー掻き…回されてー
ズボッ
ズボッ
ぶびゅ
ぶびゅ
ああああッめくれ…ッ
ズルズルズル
めくれ…るぅあぁッ！
ズボ
また…入ってくる…ううッー
また出ちゃうあああ！
ズブッ
ぶちゅるる
ふふふ女陰を掻き抉られながらの排泄、如何かな？
悔しいか？悲しいか？
ゾクゾク
何れでもなかろうそう、今攻の心を占めておるのは
ぎちぎち
ズプズプ


ただただ快楽への欲求のみであろう?
ツんあああぁ!?
ふふふ、コレだけ咥え込んでなお締まりが増す
よほど己に飢えておったか騎士王?
ひが、ひが、う・・んっぷぅう!?
くくく違うだと?


静かに…
破れんばかりに膣をかき回されておきながら
ズチュ
ブチュ
ギチュ
グチュ
ざばざば
襞まる事無く潮を吹きだし体中淫液まみれ
泡だった口からはだらしなくこぼれる唾液と嬌声
ドプ
んあーっら、らめぇ
ビュルビュル
そして瞳にうつるは憎悪でも怒りでもなくもはや欲望の光
ひが、ぅわ、わらひッいいッ!
びくびくんっ
言わッないれぇッ
これでは騎士王などとは呼べぬな
らめッらめぇえッ
さしすめ
淫…うっわらひッ…


ブタ…
そうメスブタよ
汝はもう
メスブタの王よ
違う違う
違うッ!
私はッ
わらひはぁッ
ドビュッ
ふあッ
ぶる
ぶる
あッ
中で出てッ!
ぶる


ひぁッ
ああッ！
や、やあッ
びくんッ！
あぁ!?
ビク
ビク
あ…
びくん
あぁ
ハァ
ハァ
びく びく
ハァ


後に王を救うべく国からやってきた騎士達が見たのは
王の変わり果てた姿だった
ただ無数に小さな魔物が絡み付いてはいたが
不思議な事に王の軍勢を壊滅させたという魔物の姿は無く
騎士王を連れ帰る事が出来た
だが民と騎士達の混乱を恐れた魔術師が関係者の記憶を奪い、一切の記録を抹消
現在彼の王に関わる文献にそれらの痕跡が見つかる事は無い
次の日
セイバーって、タコのお母さん?
は?
夢オチ

ケー　純

「セイバー」長室なんだが！
そろそろ皆日本「引き上げ」てしてもおかしくは　みんな時間
部屋ー入ってきたセイバーを見るなりそう切り出した
城ベーリなんだろうね　セイバーはまだ髪を結っていなかった
髪をおろしたセイバーはとても可愛い　このセイバーを見た男ア
んて思う役回るのか？　ってくらー
も線時代にもし写真ーあずまがあったとしたら　そこで捕刻に
トの人たちにもバレてると思う
「ー…？　提案ですねー」
なんでか　返答がくるまでに少し間があった。顔もどこかがい
突然「提案がある」とかいわれれば誰しがって思いましくな
か
へぇ「お疲いつーけを掛けるセイバーは以前に変らしかっ
たー　みんなもセイバーを見られただけでこの提案には価値があった
と確信する
というかですね　もう我慢できないですよ？　ぶっちゃけた話
こんな時間ーセイバーが俺の部屋ー来るって事は期待するしー
「シ、ンけウぉう」　いきなり何をするつもりですか？」
怒られた。
あれ　なんで俺の考えてた事が解ったんだろ　財布　な
「漏ーます。さっき、も　出ているよ口ごう

ねぇー
なんてこった　そんなベタな事をしていたとはね　気をつけよ
うぜ？
あの　ノロノマ」
んーなーに」
もしかして酔っていますか～
「いや　全然」
部会に酒は飲んだけどね　たまたま部屋にいてもセイバーが風口
に行ってる間しりょっとだけ飲んだ　お祭りで飲めるくらい飲ん
だだけしゃ酔れー持ってないはしなー
だけどセイバーは疑わしそうに見つめていた
ー
思わず見つめ返す
――――――――――ぽっ
照れた
はぁ　完全に酔っていますね
諦め息を吐いてセイバーは鞘を返した
「今日のところは大人しく寝てください　私ももう寝ます」
そう言ってセイバーは部屋を出て行こうとする
「ちょっと待て」
か　しとセイバーの肩を掴んで止める
「は　はい？」
提案があるって　ンクン
「まあ　確かー　てー　おねよし　ー　ー　ー　ー」

ーのでは？　何かあるなら明日にでも」
「うしゃね？や駄た　聞いてくれるまで離さない　ぞ
そうイってじっとセイバーを見つめる　今度はこっちと言　～
真顔に
ー僕ですか」
はぁ、と諦め息をついてセイバーは俺に向き直った
「解りました。～ってみてください　私にできる事なら何でも
しましょう
「ほんと」？
「本当です　それとも私が約束を破るとでも思いますか？」
しやうま
満面の笑みを浮かべて答える　なんだか楽しい展開になって来
た
「それじゃあ　コレを着てくれ」
そう言って　おもむろに取り出したのは健康的な制服
女たし　女子用
ー　ー　ーはァ
目をまくして驚くセイバー
「ななな　なんですかコレは！
「制服」
見れば解ります　私が聞いているのは何故ノロウが
女ー校の制服を持ってるのかという事です！」
ふっし　くれでイー　俺もこういう物を買ってこそ　私ずっと静かが
もうと夜の生活から何かを借りた

たHか　涙腺頂てたしね!
泣きながらHのスネーク・ふりだったと白状させよう　さかし
ぱずっぽいのを1から“で統一するくらいスネーク
忍び込むの…なんか因縁あるのか?
「よく誰にも見付かれずに　ー　…えそうではなくて!」
誰みの方が余計に批判が恋いっ!」
「失礼な、ちょっと誇りたいだけだよっ?　まぁ　言葉ながらそ
してる人の意見が介在してない事は認める…みたいではないけど」
と　かく　これは私が没収します　早かつ雑に返しておきま
もう／ひ／は大人しく寝てくださいー!」
そう言って　彼の子から追収の制服を手に取ると　セイバーは
再び踵を返した
「ちょっと待て」
俺を再びセイバーの肘を掴んで止める
なん…うかそ」
ー…た表情で俺を見ている
たよね『何でもしましょう』
ね『私が約束を破ることでも出来ますか?』」
ー　誰か　いましたが
そう…」てセイバーは帰ってき…目を逸らした
あ　なんだろコレ　なんかイケナイ予感に目覚めそうな予感

今なら放課後の教室で
『ウむ／セイの事えっらない目で見ていたでしょう?』
『み　見てません!』
『う　そ　こんなにココを硬くしているじゃない』
「それは…」
『ふふ　可愛いのね　そんなに見たいのならお願いしてごらん
なさい』
『えっ』
『お願い　ー　早く出来たら見せてあげるのよ?』
…かなんだ…て、…ンタ…とを口ずさめる
『女教師　秘密レッスン誘い〜秘密の放課後〜』ー ー〜
のな気持ちがわかる気がする。
抵抗できないだろうという立場をよく理解したー　で追い詰める
快感?
は　は　ほら　そんな事だからセイバー」
妄想でちょっぴり興奮しながらもセイバーーふめ寄る
「ば　ー
「ば?」
「馬鹿者ですか!!ーーーーーーーーっ」
怒られた
何が女教師ですか!　不埒な事を言っている　怒りますよ!
またなえていた事を口に出していたらしい

ーや　もう振ってるじゃないか　すっごく」
「つべこべーわないー　どうしたというのですか!?　しく…に
陣っているとはいえ　約束を反故にして無断に寝床を離れようとする
なんて貴方らしくない!」
んー
そういわれれば確かにちょっと調子に乗りすぎたかも知れない
が
「だけどさ　セイバー」
「なんですか?　また御託を並べようというのなら　今夜を限りに
となりますよ!」
うっわ　なんだぁ　セイバーの背に付ける退魔が絡って無い様
と…みたい
今までこんな目をしたセイバーを見たことは無い!!　ああ　ギル
ガメッシュを相手にしてる時はもっと酷かったな
そうあえて言いなアイツ、そんな扱いされてるの…戦闘も無
く講解なんてできる相手けは帝倫できる事もあるかもしれない。
もしかしたら相当見下されてる…た住時があるだけかもし
れないけど
「突然黙り込んでどうしました?　用が無いのなら今度こそ私
は行きますが」
寝室へ向かおうとするセイバーを呼び止めた
「ごめん　どうしても見たかったんだよセイバーの制服姿が」
…えほどの妄想のそりも困難なのですが
「可愛かったから」



「はい？」
「セイバーの困った顔が可愛かったからちょっと調子に乗った
すまないな」
言って大人しく頭を下げた
凹ませられた（らしい）時でも流石にここは真面目に謝らなき
ゃダメな場面だってぐらい解る
「……はぁ……まぁ良いでしょう 何を飲んだのかは知
りませんが 変な酔い方をしているようですし」
「えーっと……ああ そうだイリヤと遠坂が『お土産』とかっ
て置いていった物 あの二人で 体どこに行ったのかは知らな
いけどさ 土産だったら飲まなきゃ失礼だろ？」
「それですね、まったくあの二人は……」
え、なに？ もしかして、置き去りにされたとかそーいう話？
――思い返してみれば 二人ともどことなく楽しそうではあっ
た 二人で出かけた先が楽しかったのかなーなんて思ってい
たが
「まあ でも酔ってないし 別に何も変な事はなってないし
いいんじゃないのかな」
「今の自分の状態をおかしいと思わないのが充分おかしいので
すが……」
呆れた顔で溜め息をつく
……思い出したように聞いてきた
「――そういえば どうして私に制服を着せようなんて思っ
たのですか？」

「それは……」
前、学校見学に行った時にそんな話が出て以来、ちょっと想
像していたんだ
……もしもな セイバーと一緒に学校行けたらなんて考える
とそれだけで楽しいんだ。もし一緒のクラスになれたらとか考
えると楽し過ぎる」
「……」
「それに、セイバーが学生になったら……なんてことができたら
さ もう本当に聖杯戦争も何も無い、完全無欠に平和そのものじゃ
ないか」
そもそも 何かの誤魔化しとかでもなく 本気でサーヴァントに制
服を着せて「学生」しようなんて馬鹿な考えなんだろうとは
思う
だけど許されたって良いだろう？
今すぐ本当に転入するのは難しいだろうし せめて制服でも
着れば学生気分位味わえるんじゃないかなーって」
「……」
セイバーは黙ったまま ただ俺を見ている
今更恥ずかしくなってきた
「ま 彼は単純、さっきも言ったけどさ 純粋に見たかったん
だよ 制服を着たセイバーを、きっととてつもなく可愛いから」
照れ隠しのようにそっぽを向いてそう言った
というか なんだろうね 普段だったらこんな事思っても口に
出したりはしないんだけど

やっぱり、酔ってるのかもしれない
ただ、出た言葉は間違いなく本音だと言い切れるけど
「……」
「……」
おい、嘘？
しばらくそうしていた後、セイバーから口を開いた
「――そ、そんなに見たいですか？」
「え？」
「で、ですから『制服』です」
「そりゃ勿論」
……少しの迷いも無く頷いた
セイバーはしばらく考える素振りを見せて
「……解りました。少し待っていてください」
そう言い残して部屋を出て行く
あれ？
「着替えた後ですよ、ね」
と言い残して
……ぽつんと残される俺
どうして制服を着てくれる気になったのかなんて事は聞かない
けど……何かを得したような気がして嬉しかった
「……いや……やべ 緊張してきた」

数分後、

ランコー・ノノする方が顔一こた

「えきを考えこ、入口にやしたび監督がでてた」ユーみからそ

（一の服が、いる

不審なった

よししてみるか」

きり　〔一つ〕い部屋を出るのは初めてなので　ー

んのって

来栖みなら仕根びっくりな事を言ってしまいましたな　今は白

つい、た気密が外側から者でしな者がいない部屋なわれいないので白

しょうね」

なんかかかかけていも気配をしているようだ」ーた

頼たは悩んでもならもも星の様子を窓「て」る

「つか、どんなき」たずみっ、たよね」

参んでしょう？」

「今以外でもセイバー以見ていい外でたさい」

えっ」

よっ「本部屋」（ロスの見はすたとよおは待けほしいつけまな

んい」と乙えと話題

「あ、あれは……その……絆しょトけぎず空　それ……しトあと

親しとなり日が心いもして」

もいくてまいく（てたいくとんなーーふもちんとしてる

数が目してはいう一人なたかかな？

人井（「うさせに見るでしたろ」てーウラに案も見ずいのし

わりれました……もしも思うったなくても気要しし

とうなのいしておに

三人とも心セイバーは何か？

最かるをも大いですよく、敵を今からも近くにう一人目が

（知る

をうだね、研究中のセイバーかな人

──

──家を？

前けに見てたか、「ようきみたん族をみるって人のトかが絶つた

魂向の新聞様ぱてイーー以見上に動いが行ったら、ちょっと

え気がしてて知したら見すとてはカートを作りのました

何えのきりりすーかセイバーの可能性を推定でさせている

見前わた間違にかに　どうしてということも無罪に現できるのか

セイバーが食ているから、わわれはそれまでなんかがその

もイーーも否定もは出ていて「る

どういうも遅からなかのかは無ないが　セイバーは遅しんくる

以上みしてお会えを持っていなかった

──ソワ……　問していますか？

──？

呼ばれて戦い部る

ドの前は、か様けないとえした　日、まもずん

ートラ　ぞっとしてしま。

ソワイ……そんな見つめられたら皮ずかしー

セイバーと顔も本に見つめて電報を発想した。

われはてはじめて、すったとセイバー（と最初わたしたちまでを自分する

……彼らなんたか、悠然うかがし

し　ひとりまいた

そうした一で、彼の身体は変を持っていく中、なった

彼がようと

こうするには、入いは前の（ていかい？ようま報に前見させるかに限

たは分の暇子がどっしてくれ？その奥すね」

え　自分をいう奥がかってうのがてくれたもので

をして　こうするしか持ったことのかなりの部分が　はっきりするとかなき

のもあなーか？

日分の先週すこしありの変員なのセイバーはちょっと何か正

当たり

…私にかに

…しゃれ、はー？

……ぼ　当面は不なきす（

しゃあ、ぼーむ」

このやを当てみたけどとさもないでマヤ……　と戦して九……な……

たけしないもうしいそうけなしい

のも思いしてもにもうのはいきら？セイバーとの最後は会なのか本

「えだしいもなりまっか……？」……勝がのセイバーとの約束を殺ったりする気は

ん会かんだろう。

一 それはそうですが[illegible]とこがウマっ[illegible] 渋滞と…」

退屈しすぎるってのは 恐らく相談出来ってそう ことじゃないと

じーんだがな

…ん

しかし 何で気付かないかね 俺の裏側を受けてりゃ見惚れて

た目位普通気付くだろう」

セイバーはまた何か言って口を

いい加減うるさい、うるさいから黙らせる

「聞いていますかシロ――――んう、[illegible]」

何も言えないように 唇を塞いだ

胸を押されるが 力は弱い

たぁ 構わずしキスを続けた

「…ん…」

…ん

」 セイバーの唇は驚くほど柔らかい 何度唇を交わしても

この感触に慣れる事は無いような気がする

あ…ったかいです シロウ ため…

気持ちよくもあるセイバー

大が 別へ耳は貸さない

驚いて目を閉じられたりしないよう 少し強く顎を押さえる

呼吸のために開いた唇から舌を入れる!

「んっ…し シロウ…ん…」

少し抵抗が強くなった

無視して顔を引き寄せると そ[illegible]しらん 撫く

舌を躍らせる

んぅっ… ん、ふっ…んっ…」

舌がセイバーの舌に触れる と セイバーの舌は奥に逃げよ

うとした

…セイバー」

俺を呼んだ瞬間、ビクッと肩が震えたかと思うと 口内の熱が

増した

セイバーも 舌を伸ばして

逃げは無い。だが セイバーの舌は逃げるのを止めた。

それだけで充分だ セイバーの舌を逃がさないよう俺

の舌を絡ませる

ちゅ、ちゅる ちゅ…」

んんぅ…んぅ はぁ はっ…ちゅっ…」

俺が顎を押さえているせいでセイバーの口は開いたままになっ

ている

口の端から唾液が垂れた

セイバーはいや[illegible]をするように首を振るが 俺は許さない

口内への愛撫を激しくする 執拗に舌をなぞり すすり上げ

る

そして わざとセイバーから舌を引き出してきた

ん…ちゅっ ちゅる けん

あ…ん、んぁ ちゅる

お互いの舌を唾液は[illegible]糸を引[illegible]

溜まった唾液をセイバーに送り込んだ。

ん！ [illegible]

少し驚いた表情を浮かべたが 躊躇を見せず喉を鳴らして[illegible]

く。

舐めたくなる 口蓋に舌を這わす

ちろちろと舐めると、セイバーの舌が俺の舌を追いかけてきた

逃げるように 舌と歯の間に舌を入れる

綺麗なセイバーの歯列をなぞっていく

またセイバーの舌が迫ってくるが 俺は舌を引っ込め顔を離ん

でいた手を離すと 離れるだけのキスに戻した。

…ん ちゅ…」

暫くセイバーの舌を弄んでから 顔を離した

ノロウ…

俺を呼ぶセイバーの声はどこか拗ねるような響きがあった

弾んだセイバーの身も心も[illegible]たんだろう

う 酷いですシロウ これは…

突然火がついたように真っ赤な顔になって俯いてしまった

そもそも 私 同じいや[illegible]このような行為に

がーっと赤い顔で捲くし立ててるセイバーの手を取って俺の胸に

当てる

し シロウ？ 体何を？

可愛い

え？」

河南岸のセイバーも可愛く可愛い それから 見惚れてた



」嘘です　先ほど取ってていなし——
ーュでない　というか　服言っていないんだったらこんな
ーキドキしたりしな　しわってるなろ？」
胸ー当てたセイバーの手に力がこもる
「　ええ　まるで早鐘のようです」
「俺がこんなにドキドキしてるの」「早鐘ーァ」なんてよ
れ　ぶ現能な事をさうとセイバー戦ぞ？ったドキスした
漏らないからな俺は」
口に出して　今更随分と恥ずかしくなってきた
赤い顔でセイバーが視線を逸らす
ー　すいませんシロウ　漏るのは私の方だ
視線を戻すと　セイバーのまっすぐな視線に射止められた
いつもこの視線に捉えられると目を逸らせなくなる
「ええ　シロウが私に制服を着て欲しいとずっと理由を知った
時気ったのです　シロウは私をただの『女の子』として扱ってく
れているんだと
「——」
「私はサーヴァントです　剣となる者であって戦いを仕てる
上など出来ない　だが　平和な今であれば　時の帯であれば
この『女の子』として今この時だけ服装ら自分を許して欲しいと
そうよ　よした
だから　制服を着てくれないなったんだな
鼓を結むなったのもきっと同じ理由だ
「それなのに　ジロ制服を着てシロウの口の前に出たらシロウ
を縫ってしまった　こんなりしくない好きをしている私を見逃に
しているのではないかと　——思えば　ロウは始め余り遠を
『女の子』として扱ってくれていたのに　——　少しずつ寂しい」
ばか　許すも許さないもあるか」
手を伸ばし　セイバーの頬に触れる　耳に掛かった髪をそっと
払う
——ん
どちらからともなく　顔を寄せて再び唇を重ねた
唇を割って舌を入れる
今度はお互い求め合うように絡ませた
唇を寄せ　より深く
「ん　ちゅ　ちゅっ　えろ　ん　ふぅ
んぅぅーーちゅ　ーはっ　んくんんっ　ちゅっ
絡み合った唾液を分け合って飲み込んでいく
引き出される甘美な快楽
　もっとセイバーと触れたい
そう思った瞬間　唇を合わせたままセイバーをベッドに押し倒していた
あ
体のトレ組み敷かれながら　回ってくる見上げてくる瞳に拒む色は無い
セイバー
名を呼ぶ
それだけで気持ちは伝わった
ー　制服　皺れてしまいますよ
ええ　よしっかり脱ごうこと
足掛めかしてそっと　セイバーは笑った
「——なんだ　ちょっと安心した
よ」
ショーツを脱がすと　セイバーの秘所は蜜を溢れさせていた
いや　なんだかんだ　でちゃんと本気で感じてくれてたんだなって
あ　あまり見ないで欲しいのですが
それは無理　こんなに綺麗なの見るなっておれても
そうって　セイバーの割れ目にそっと触れた
指先で秘裂を割る
「ん　やっぱり綺麗だ
ーそこを　あ　褒められても　あまり嬉しくないのですが
ー」
それはそうかもしれない　けどな
そう言われても綺麗なのは綺麗だ
囁いたせいで　溢れた蜜が俺の指を濡らした
頬を寄せる
ゆっくりと割れ目に指を押し
——シロウ　な　な
[illegible]

脚を閉じようとしたふとももを押さえる
俺が　漏しセイバーは俺のを舐めてくれただろう　お返し
何かされる訳にぐっと足を開かせると、今度こそセイバーの
割れ目に舌を伸ばした。
「あっ　ひゃっ――んぅぅぅっ――」
甘酸っぱい匂いを吸い込みながら　セイバーの入り口の周りを
舐めた。
また直接割れ目の中を刺激した訳でもないのに感じてしまうら
しい
このまま一気を良くして　入り口の周りを執拗に舐める
「んぅっ　ふ―んく――ふぅ――」
直接感じる部分ではない場所を攻められているせいだろう
もどかしげに腰が動く
このまま焦らし続けてみたい気もしたが　もう俺が我慢できな
かった
「み――えろ――ちゅっ」
指先で――みう広く割り開きつつ　舌先を入れる
剥き出しになった粘膜に舌を這わせながら　指先でクリトリス
を弄った
「ちゅーちゅる――じゅ　ずじゅ――」
舌を立てて舐めしゃぶる。
俺がノンと肉芽を嬲ってた
ぴんっと軽く指先で弾く
「あぁあっ――し　ノロウ―　ひぐ――ん――」

声のトーンが上がった
反射的に脚が閉じようとする
「　セイバー見ていて」
「で　ですが　ノロウ――ん――ひゃん」
クリトリスの皮を剥いて引っ掻くように弄っていく
口内に入る量が増した蜜を音を立てて嚥下しながら　舌での愛撫を続
ける
「ん――くちゅっ――れりゅ――」
「あ　あっ――んぅぅ――い　いい――」
閉じかけていた足からゆっくりと力が抜けていく　俺の舌と指
で与えられる快感に時折腰を浮かせるようになっていた
「はっ――んん――　そんな　泥方っ――た　めですっ――もっ
とゆっくりぃ　んぅっ――」
「俺ぇ　もっとする」
「　あぁっ　ど　して――　意地悪」
もっとセイバーを鳴かせてみたい
トロトロと蜜を滴す割れ目に舌を這わせる　舌でセイバーの割れ目
」を解きほぐしながら　指でクリトリスを弄るのも忘れない　いよ
いよ激しくセイバーの膣口を引っ掻いてやる
「ふぁ　あぁあ――　ぁぅぅっ――」
「ノウ　んっ――　コノ　コク――」
割れ目に溢れて舌から伝ってくる蜜を飲む
喉を鳴らして飲める程　今やセイバーの愛液は溢れていた
「あ　やっ――　セ――舌が　私の　ひゃんっ　な――」

「しえって――　ためっ――」
頭に手を置きながら　セイバーの脚は俺の体を締
めつけようとしてくる
「ん　セイバー――　おいしい――」
もっと味わいたい
そう思い　さんざん弄り回したせいでコリコリにしこり赤くな
ったクリトリスを強く押しつぶした
「ひぁぁっ――　あ　あぁぁっ――!!」
嬌声が跳ね上がった。
それと同時に、とぷりと溢れ出したセイバーの蜜を飲み干して
いく
「だめ　だめですノロウ――　あぅ　っ――　そんなにし
たらもう――」
「イッちゃう？」
俺がそう聞くと　真っ赤になった顔でコクコクと頷いた
「じゃあ　イッちゃって良いよ」
折角だから　このままイクところを見せて欲しい。
指を膣内に挿入させると　すっかりとろけていたセイバーの肉
壁は俺の指をあっさりと迎え入れた。熱い肉壁に締め付けられな
がら　セイバーの膣内を掻き回す
「そ、んなっ――　――んぅっ――い　や――」
さっきまでのクンニでもうセイバーには何の余裕も無い。一気
に　イカせてやろうとクリトリスを刺激する
「――　や　ぅ――　やですぅ――　いくっ」

だが　もイバーは頑なしイクを目する
え体は流行も良くなげにぉ！」
押収して「こんな事は無いだろうが　俺とはでれく」
「っな
とい
たて、
ず　　　陥ゞは一く
な――――
「ッそーなーや」て腕の裡性を六吐　経験して、くれ
はどお明、自分は？」
「ーーーーーーー　い」さ」　かそうた目たそうし
「
ず」
ず胸を離す　脚肉ーテしぶんでーん掛く「ぞう抜ー」
と続行的な音がした
「ー胱れて、る間　俺の桂肉を兵　ほこ見すーが一
「ー
「ー　　きり　　ず肉砕く取り出す
「ーーーーーーの売価でょすの愛液を出すもイバーお潜在目　　日
分ぞを　を剰したでも。
俺目背　き　きのもイくーの　ぬ体順　でか　俺ょうちて
くーと繋がる目しかあそ、れなうった
「あ　脂を」

「行くぞ　セイバー」
身が吹いたが　聞こえない
大さくセイバーの両足を開く
みのまま腰を前進させ　ゆっくりと俺のモノをセイバーのなか
に埋めていく　拒せね　ず突　セイバーの中はきつく俺のモノを
締め付けてくる　だが　トロトロに濡れたセイバーの中は貫段よ
りも簡単に俺のものを受け入れた
「ふ　んん」
」
セイバーの中はじっくり熱かった　一の腕で貫えい前具　って
つーな　するのような網覚
く。ー
あまりの快楽に目が眩れた　セイバーの膣内は肉棒の存くを確
かめるかのようにギュッ　締め付けてくる
また入れたばかりなのー　これまましっとしてーるだけですぐ
絶頂してしまいそうだ
セイくー
まぶ呼びながら目を合わせる
あ　みん
「我材を交わすー」俺はいきなり大きく腰を取り出した
「ああっ　ーは　んっーー　ーーあぁ　　ふぇん　ょー
突如りえ、れた強烈な快感にもイバーはや体　せて喘ぐ
脚を突き入れる度にセイバーは膣内をーーな　　き　ぎさ
「俺のものを精　付ける
？」

結　ていない足を抱え込しながら　セイバーは何度も俺の名前
を呼んだ
それが嬉しくて　夢中で腰を振る
「ひゃっ　ンロウ　ー　おなか　熱くてー　あっ　だめっー」
セイバーの声は海く　これだけはセーブていると誰かに聞かれ
かれてしまうかもしれない　が　今はもうそんな事はどうでも良か
ノ　セイバー　一緒でノ俺だけしかもう考えられない
快楽に流し込まれてくる射精欲を堪えながら　俺はセイバーの
膣内を突き上げた
「あっ　やっ　くううんっー　し　シロノ　もう　もう私はー」
さっきまでセイバーは絶頂寸前まで感じていたんだ　長くは堪
えられないだろう
あっー　イヤっ　　だめっ　シロウ　　あっ　お願いです」
「いっしょ　緒ー
「だ　いしょにセイバー休もっ」
限界が近いと告げると　腕が外れんようにセイバーは　よし腕
股を抱けーった
はい　はいっ、　ぎる　はや、もう　あ、　してっ
「ああああああああ　ノノ　ー
膣内を流れたセイバーの膣が俺のモノを締め付けた
それで俺の身も限界を迎える　抗くようなつもりで思　つきり
腰を叩きつける
ーーょ　ー　しーノ　　　　しっノ　しつきあ
吸　　え　み　　しー　ーの　液膣に溶けて　を注ぎ込む



「はぁ！　あー　ノロウの　　腕内ー」
絶頂が止まらない　喘ながら驚くほど大量の精液を吐き出した
「　　あ　こぼれてしまいます　」
狭いセイバーの腕内はすぐに　けとなり　顰が　った白濁液が
溢れ出してくる
狭い腕内では収みきれないのに　セイバーの腕内は精子を搾り
取るように　きゅーっと俺のモノを締め付けてくる
「んっ　熱い　　溶けてしまいそうです　　」
陶然と呟くセイバーを見て　興奮に愛しさが込み上げる
と　同時に興奮もまた収まらない
ドクと放出しても萎えず　俺のモノはまだ衰えも知らず猛り
セイバー
目を細めて余韻に浸っているセイバーに声を掛ける
ん……　は　い？
　　まだ足りないみたいだ
　　　　　あ
でっっと、俺の肉棒がまた自分の腕内で固く膨らんだままだ
ということに気付いたようだ
もう　困りもの　！
……しかたないですね
口ではそういいながらも　満更でも無さそうな感じで自分から
腕を開いてくれた
抜かない　まま　ストンを開始する
あっ　やっ　あん
ぐちゅぐちゅと音をたて　俺の出した精液とセイバーの愛液が
交じり合う
腰を打ち付ける度にその混合液がもれ落ちてくる
ほら　セイバーこんなになってる
下を見ればお互いが混ざり合った液を掬い取ってセイバーに見せた
「舐めて
口の前に伸ばすと　セイバーは赤い舌を　の指を口にする
ちゅっ」
指先と舐めるセイバーの感触が俺の興奮を煽った
その表情を見て
もっと自分の精をセイバーの中に刻み付けたい
そんな声を上げ
あ……っう……　凄く　　あっ！」
段と腰を早めた肉棒でセイバーの腕内を抉っていく
だめっ！　そんな……激しくしたら　すぐ……」
構わず　グイッと深く突いた
――っあぁぁ！！
さっきイッたばかりの腕にいきなり強烈な快感を叩きつけられ
たせいか　セイバーの腕内はびくびく痙攣を続けていた
そのままの勢いでピストンの速度を上げる
何度も何度も絶頂する度に　そうしなかったら壊れてしまうのか
らしい
既にセイバーは何度も体を痙攣させていた
ドクッ　絶頂はもう何度も迎えているのだろう
だが　俺のものを締め付けるのはまるで手で握られているかの
ように強い
いつも凛としたセイバーの顔が快感に崩れていく
いっ　やっ　だめです　ノロウ　　いっ　　イッ！
もっとその表情が見たい
そう思い　より深く交わるためにセイバーの脚をぐっと掴んで
引き寄せた
カリのあたりまで引き抜くと　一気に腰を入れる
あああぁぁっ！」
「ダ……お願いです　　もう
それとともに　セイバーの声が跳ね上がって
あ　うたって　うたって　ますっ！　ひゃんっ！」
突き入れる度にイッてしまうのか　快感が俺の快感を高めていく
「あっ　ノロ　　もう　ああああっ！　んっぅっ！」
「イく……セイバー　また腕内に
「はい　出して　ください！　ノロウ　の　んっっ！　私の
腕内に……出して　です　　あっっ！」
おきつるように痙攣するセイバーの腕内にペニスを突き
入れた
最後の力で腰を振る
ひぃっ！　っ！　と腕が　痙れて　　あ　あ　あ　あああ　！
ため　　もうっ」
レイ……の　射精に吸い付くっていく

「ーーっ　ーーーーーーイーーー　よょ」
「イノ　イノ　よぉおあみ　ーーー」
ーーは絶頂のメを上げた剣ノメ　体を痙攣していて
セイバーは仰し上げた声　昨日の精を噴き放った
「ーーーノ　ビュルッー　ビュルルルノノ」
「熱いーーかー　熱い熱ーー　お腹にーー」
セーーの子宮のーに精液を叩き出していく
カリカリと膣が収えるが　セイバーの腰を強く掴んで押し付けて射精を続けた
「あうっ　あ　あ　あーーんっーーんんっ」
セイバーは絶頂の余韻を感じながら　俺の吐き出す精液をそう入れていく　二度目とは思えないほどの量をセイバーの膣内へ流し込む
「ビュノーー　ビュクノーーー」
最後の一滴まで注ぎ込むと　セイバーの膣内からペニスを引き抜いた
その途端、ごぼりと音がしそうなほどの量の精液がセイバーの割れ目から溢れ出る
「んっーー溢れて」
無茶苦茶なんだろう
瞬殺しても伸ばしてもセイバーは溢れてくる精液をーちゃんとちゃと掻き回していた
「は　ごした顔で　口調した精液を感じ続ける自分の状態を
ーー ノ

「ーーあもイ、このあーりンずー　ノ　口を離すことが出来たーーる」
「ん　ん　れろ」
精液を精液をおもむろーー口に運んで飲ーした
「んーよし」
「ーー」
「セイバー」
固くわたってあれはまだ吐き出したーも固わらず　俺のモノは未だも固さを取り戻してい
ーくっ　なんでも　同時のりょー自分から大きくなるほどーうなってしまえばもう考える事はーつしかない
またセイバーと交わりたいー
「セイバー」
「？」
まだ意識がはっきりしていないみたいで　口の中ったでいたー
セイバー後ろ向いて　お尻を上げて
たが　セイバーは黙って言われるまま、後ろ向きになりお尻を突き出した
こうすると　固る中ー溢されたせいでピンク色ーなったセイバーの割れ目がはっきりと見える
その一もはセイバーの可愛らしいーーキが見え
ドキッとした感情が溢して　指先でそこを刺激してみる
「ーょ　んっ」
擦きだが　確かに反応があった
それーは気分を良くして　じょっこしょと擦る
「ん　あっ　あっ　」
ちょっとの刺激で敏感に声をあげるセイバー
それが楽しくてーキルを刺激していると　セイバーがはっきりと意識を取り戻した
「あっ　あっうんん　あっしろう？　ーえ、えっとどうして　こんな」
それと同時に俺はセイバーの膣内へペニスを突き入れていた
「え！　シャウっ！？　ーシロウ？」
「ごめん　セイバーまた入りたいー」
「でも　セイバーが嫌ならもうこれ以上はしない　我慢する」
見上げてくるセイバーの瞳をじっと見つめてそう言った
いきなり入れておいてなんだが　これは本気だった
俺はセイバーを無理矢理犯したいんじゃない
「ふふ　ーー」
「ーーエウは言っても　シロウのモノはまだカチカチです」
と微笑する
やせ我慢だった
黙ってセイバーを見つめる
「ん　ーんっ　ーー」
「ー　ペニスに柔らか　刺激を感じる

ーが腰を動かしていた。

ようっ！」

「、腕両で俺のモノを撫でるかのように舐を这守

うーっ」

「　　人ええです　ノロウ……私もまだ」

セイバーは息切るしながらも、健気に俺のモノを刺激してくる

それでも浮にやられた

怪物的な快感に収縮感も　なくなってくる。

――ん

「さぁ　ノロウ　来てください

ずしくは持たない。

てう思う間もなく勢いよく腰を振った

俺の下腹部とセイバーのお尻がぶつかってぱんぱんと卑猥な音

を立てる　ペニスに引っ張られてめくれるセイバーの男が見える

あっ　はっ　ああっ　すごい　さっきよりも

奥まで　ひっ

俺全身くとセイバーの膣内が娼婦のように俺のモノを吸い付く

くる。って続け　口も閉じて無意になっているペニスにい

刺激にたまった　このままだと搾り取られてしまいそ

うエス

やっ。

身にかかったような声が俺の鼓膜に届く。

ああ　　ん　んん　いい　きもちいい　　くぅっん

っ　はあ　はっ　　んっ　あ

ぬるぬるとしてるクセに　セイバーの膣内は俺にペニスを全し、

まりと揉みように締め付けてくる　しかも　セイバー自身も快感

を貪ようにて尻を振ってくるので　ますます俺の方には余裕が無

い

もう何回我もしないうちに射精してしまうだろうと確信する

ああっ　ノロウ　ノロウ　　いつでも　好きな時に

そういうセイバーの声にも余裕は無い

自分も快感に喘いでいるクセに、そんな事をいうセイバーを見

て逆に意地になった

絶対　緒にイカせてやる

セイバーの腰をしっかりと掴んで　より深い所を狙って突き入

れた

突き入れたペニスを気で刺し小刻みに穿く　何度か繰り返えし

た後　さと抜いて入口の周りをぐちゅぐちゅと刺激してやり　ま

た深く突き入れる

あ　ひぃぁ　あ　あ　あぅあぁ

交わっている部分から　白濁した液体が押し出されこぼれ落ち

る　ーーダーラと蜜の糸を垂らしてくる

ああ　あああぁっぁっ　　、　　　　、　　　ーあ。

イノー　イってしまいますっー」

よがるセイバーの声にも　もう何の余裕も無かった。

俺も　とにセイバーを攻めあげる

んっ　　うっ　あああー　だめ　もうだめっー　あっー

んくっっっー

もう技巧も何も無い　ただ深く求めるために　激しくセイバー

の膣内に俺のペニスを突き入れる

わかるかと目の前が明滅する。もう俺も限界か

セイバーっ」

あ　あ　あああああっ　　　気持ちいく　　いくなって

イノっー　　んうぅぅー　　あんっ　そっ　も　もうっ」

激しく嬌声を上げながら　セイバーの背中が反り上がっていく

その光景を見ながら俺は射精した。

快感を貪りながら突き入れる

ノロウっ　ノロウっ　ぁ　あああっ　あ　あ　あ　やっ

やあああい　ん　んんっ　ひやううっっっっつい」

――セイバー」

ああああぁー

がくんと、力が抜けてセイバーが崩れ落ちた。

その弾みでセイバーの膣内からペニスが抜ける

セイバーの赤い服の胸引に振りつけながら射精を続ける

俺の吹き出した精液が背中や腰に降り注いでいく。

はぁ――　ぁっーーん　んんっ　」

ぐったりと崩れ伏したまま　俺の精液を受け止める。



へと睡魔の攻しれたれーよ身を呼撃させ、した
ーん　シャー　んんっー
っ大きく背入、ようやく睡魔の鎖から解放されたセイバーが
ーんと腕伸げに転がった
けノ、ー
んぞー
顔を名寄ると鳴を塞がれた
レイバーの頭を撫でながら　しばらくそのままけを手お続けた
「折角風呂ーりたったの」　また風呂入りなおしだな」
「そうですね　一緒に入りますか？
魅力的だけどな　また無いそうな気がする
笑われた
恥ずかしくなって　部屋の隅に視線を向ける
しかし我ながら　よくこんなに出したもんだ
布団は粘液でちょんびしょでしゃくちゃになっーるし
ャー　、サーブ　ーしばぁ　え　んノ　されては困
えー　うふもしますね
ー
——安心しているんだか　あなたちぇ疲れが無　までもなくん
くないかすもし子供が出来たらどうしようレイバーめが飾たった
たらきっと可愛いに違いない——
曖昧しゃんな事が頭の中を駆け巡り

気が行くことは全然聞いていた
「お腹」
はいッ」
名前を考えておかなとな」
そうーく彼ー少し経いた顔をしたが
————そうですね」
答えたセイバーは満面に微笑んでいた
ここうしてここにいられる事がそもそも夢のようなものだ
このままいつまでも続くかのように見えても　それは脆く消え
る夜夜の夢
おりいそんな事は解ってる
だけど　おり消なーと笑い飛ばして紛らしてしまっーは笑のあ
子供は未来をきるだろう？
夕約束での交わりが確のようにはっきりと語り合う
たとえ紀めてしまう夢だとしても　交わした想いだけは本当だ
——　何考えてるんだか
〆恥ずかしくなり　話題化するように切い良くでちーから
風呂に行こうか
はい　　　遅れないでくださいね？
判ってる」
身体の気いに寒を交わしながら　セイバーのキ　　　シャ出
遠ざくは自分を　ォ　ノ　時口　トぃビー　——

For Adult Only

RE03

presented by RUBBISH Selecting Squad